岩手県立大学社会福祉学部紀要　第 25 巻（2023.3）87 － 94

子育て世帯の生活実態が幼児期の読書環境に与える影響
－保護者調査からみる公立図書館に対する潜在的ニーズ－

櫻　幸恵[1]・下平　なをみ[2]・児玉　康宏[3]

The impact of living conditions in childrearing households on childhood reading environments
－ Potential need for public libraries from parent survey －

SAKURA Yukie[1] , SHIMOTAI Naomi[2] , KODAMA Yasuhiro[3]

本稿では、保育園・認定こども園の 3 歳児・5 歳児クラスの保護者に対して行った子どもと絵本に関する調査に基づき、子育て世帯の生活実態が家庭内の読書環境や幼児への読み聞かせ及び図書館利用に与える影響について分析した。その結果、多くの親が子どもには本好きになってほしいと願っているにも関わらず、家庭の読書環境や読み聞かせ回数、図書館利用に差異がみられた。また、親自身の学歴達成に幼児期の読書環境が影響している可能性があり、幼児期からの読書支援の重要性が示唆された。一方、公立図書館の利用環境の改善や読書に関心が薄い親への働きかけにより図書館利用や家庭の読書環境が改善される可能性が示された。
キーワード : 幼児期の読書支援、読み聞かせ、家庭環境、公立図書館、生活の中における図書館

This paper analyzes the impact of living conditions in childrearing households on the home reading environment, parents reading to children, and library usage. It is based on a survey regarding children and picture books, conducted for parents who have 3 year old and 5 year old children in nursery schools and certified childcare centers. The results showed that there were notable gaps in home reading environments, number of times parents read to children, and library usage. This was regardless of parents' wishes for their children to learn to enjoy books. Furthermore, there is a possibility that the educational background and achievements of the parents themselves have an impact on childhood reading environments, suggesting the need for reading support from childhood. On the other hand, this suggests the possibility of improved library usage and home reading environments from improving the usage environment of public libraries and encouraging parents who have low interest in reading.
Keywords: Childhood reading support, reading to children, home environment, public libraries, the library in the life of the user

Ⅰ．問題の所在と研究の背景

本稿は、北上市立中央図書館と協働で実施した令和 2 年度岩手県立大学地域政策研究センター地域協働研究ステージⅠ（課題解決プラン策定ステージ）「多様な家庭の未就学児の親子を対象とした読書支援プログラムの開発」（研究代表櫻幸恵）の研究成果の一部である。

本研究の端緒となる北上市立中央図書館が平成 26 年度に実施した「市民アンケート」では、回答者の 56.6% がほとんど市立図書館を利用しておらず、図書館を利用しない人のうち 26.8%（全体の 15.8%）は読書習慣がないと回答し、その割合は前回調査時（平成 14 年度）より増加していた（北上市立中央図書館, 2014）。また、「北上市読書活動状況調査」では、市内 59 か所の乳幼児施設の 37％が子どもの読書に関する

[1]岩手県立大学社会福祉学部　[2]岩手県立大学社会福祉学部　[3]岩手県北上市立中央図書館

親の関心が薄れていると回答した(北上市教育委員会, 2016)。北上市教育委員会の平成30年度「家庭読書週間に関するアンケート調査」では、期間中の読書目標値は達成された一方で、小学6年生の10.6%、保護者の33.1%が期間中に全く本を読んでいなかった（北上市教育委員会, 2019)。読書習慣の定着には、乳幼児期から学童期の読書環境が重要なことから、これまで北上市では全世帯を対象とした4か月児健診時のブックスタート事業や読み聞かせ活動、学校における読書活動に熱心に取り組んできた。その結果、市内の小学生の読書習慣は県平均を上回っている（北上市教育委員会, 2019)。しかし、前述の調査結果は、子どもの読書環境が整っていないと推測される家庭が一定数存在することを示している。

また、平成30年度に実施した「北上市子どもの生活実態調査」の結果では、調査対象全体の9.6%、ひとり親世帯の41.6%が国の定義する貧困基準以下で生活し、基準以下の世帯全体の約4割が食料や衣服を買えないことがあり、ひとり親世帯の6割が時間に余裕がなく子どもの医療受診ができていなかった(北上市, 2019)。

子どもの読書行動と家庭環境に関する先行研究では、読み聞かせや、図書館・本屋に連れていく等、子どもと直接かかわることは、子どもの読書に対する感情に影響を与えるとされ、物理的な環境だけでなく、むしろ参加の機会を与えるような親からの対人的な働きかけという社会的環境が重要であることが明らかになっている（秋田, 1992)。しかし、上記の子どもの生活実態調査の結果をみると、仮に親が子どもの読書に関心があっても、先行文献が示す“読書環境を整え、親から子へ働きかけを行うこと”が容易でない世帯があるのではないかと推察された。

また、読書活動と主観的幸福感には正の関連があり(Benesch & Strutzer, 2005)、非認知能力の獲得にもポジティヴな効果を与えるとされている（Jeffcoat & Hayes 2012)。このことから、子どもが育つ世帯の生活実態が子どもの読書環境へどのように影響しているかについて、その現状を早急に把握する必要があると判断された。

他方、図書館研究においては2000年代以降、アメリカを中心に従来の図書館情報学という専門領域を超えた「利用者の生活の中における図書館（the library in the life of the user)」[1]という広い観点からの議論がなされており、川崎（2011）は、日本における新たな「場としての図書館」の視点での図書館研究を提示した。そこでは、館内活動だけでなく、利用者＝住民が属する社会やコミュニティを含む、より俯瞰的な見地から図書館の意味や価値が考察される。久野(2016)は、図書館における「出会いの場」「交流の場」の積極的な創出は、個人やコミュニティにおける「社会関係資本」の創出と蓄積をもたらし、個人と社会を豊かに健全にし、図書館は大人、子ども、裕福な人、貧しい人までが利用する魅力ある公共の場「屋根のある広場」として機能しうるとする。

上記を踏まえて、本研究では様々な生活実態から読書環境が整わず、また図書館にアクセスが難しい世帯の親子にこそ、「利用者の生活の中における図書館(the library in the life of the user)」としての公立図書館に対する潜在的ニーズがあると仮定し、地域の子育て世帯の生活実態と読書習慣や図書館利用に関する調査・分析を行うこととした。

Ⅱ．研究目的

本研究では、子育て世帯の生活実態及び読書環境、図書館利用等を調査・分析し、公立図書館に対する潜在的ニーズを把握する。結果を踏まえ、本に触れる機会の少ない家庭で育つ子どもの読書習慣を涵養するため、保護者支援も視野に入れた複合的読書支援のコンセプトと具体的方策を検討し、子どもの読書環境の改善に寄与することを研究目的とした。

Ⅲ．研究方法

１．対象と方法

北上市内の保育園・こども園に通園する3歳児・5歳児クラスの保護者を対象に、2020年12月1日現在の状況について質問紙調査を実施した。質問項目は、家族構成、家庭の読書環境、保護者の子どもへの働きかけ、子どもと本のかかわり、図書館利用、保護者の生活実態や学歴達成、図書館への評価等、12分類45項目にわたる。調査は本学と北上市立中央図書館の連名で実施し、北上市内の保育園･こども園経由で配布･回収をした。配布数は753票、有効回答数は541票、有効回収率は71.8%だった。

２．倫理的配慮

本学の研究倫理規定に基づき、研究の目的・意義や

研究方法、被調査者の回答の自由及び匿名性の担保やデータの慎重な取り扱い等を被調査者に書面で説明し了解を得たうえで調査を実施した。

Ⅳ．結果

１．調査対象の概要

今回の調査回答者（ｎ＝541）の属性を見ると、回答者の94.1％が母親､5.7％が父親､0.2％が祖母で､母親、父親の両方とも６割が30代である。家族構成は調査対象児・母親・父親・きょうだいの構成が最も多く、調査対象児を含むきょうだい数は２人が49.2%、１人が24.2%で、調査対象児のクラスは３歳児クラスが55.1%で５歳児よりやや多い。保護者の最終学歴は、父親が高卒46.0％大卒20.5%、母親は高卒30.5%、専門学校卒29.7％である。雇用形態は、父親は正規社員が77.1%、母親は正規社員が50.8%、パートアルバイトが29.6%である。世帯年収は400万－600万未満が26.6%で最も多く、600万－800万未満が19.4%、200万－400万円未満が17.2%、200万未満が2.2%となっている。

２．調査結果の概要

ここでは、45項目の質問項目のうち、世帯の読書環境、読み聞かせなどの保護者のかかわり及び図書館利用が､子どもの本の好き嫌いにどう影響しているか、また、世帯の生活実態のうち世帯年収が世帯の子どもの読書環境や保護者のかかわり及び図書館利用にどう影響しているかに絞って結果概要を記載する。

（１）子どもと本に関する保護者の思い

成長していく中で子どもには本が好きな子になってほしいと思うか、という質問に対し、とても思う・まあそう思うとの回答合計は89.5%で、約９割の保護者は自分の子どもに本好きになってほしいと思っている。保護者の本好きになって欲しいという思いは、世帯収入の多寡など生活実態の違いに関わらず同様の傾向がみられる。

（２）読み聞かせと子どもの絵本や本[2]の好き嫌い

①　家庭での絵本や本の読み聞かせ頻度

子どもに対し、絵本や本の読み聞かせをしている家庭は全体の82.6%で８割を越える家庭で子どもへの読み聞かせが行われている。週に1-2回が32.2%で最も多く、ほとんど毎日が19.0%ある。しかし、月に1-3日のみの家庭が18.1%あり、ほとんどしていない家庭17.0%と合わせて35.1%の家庭では、親の読み聞かせを通して子どもが本に触れる機会は希薄である。

②　読み聞かせができない理由（ｎ=92）

家庭での読み聞かせができない理由（複数回答）を尋ねると、時間がないが60.9%で最も多く、疲れている18.5%、読むのが面倒16.3%、適当な絵本や本が家にない13.0%、保育園でしているから不要5.4%、方法が分からない1.1%であり、保護者の生活の余裕のなさが子どもの読書体験に影響していることが分かる。また、少数ではあるが、読み聞かせが子どもに与える影響を重要視していない保護者も存在している。

③ 読み聞かせ頻度と子どもの絵本や本の好き嫌い

読み聞かせの頻度と子どもの絵本や本の好き嫌いのクロス集計（表１）では、ほとんど毎日読み聞かせをしている家庭の子どもで、とても本が好きという割合は73.8%、月に１-3日の家庭では17.3%、ほとんどしていない家庭では7.6%であり、読み聞かせの頻度が多い家庭ほど子どもが本好きの割合は高い。毎日読み聞かせをしている家庭とほとんどしていない家庭では、子どもが本好きである割合には10倍近いポイント差がある。

表１　家庭での絵本や本の読み聞かせ頻度と絵本や本の好き嫌いのクロス表

			絵本や本の好き嫌い				
			とても好き	まあまあ好き	あまり好きではない	まったく好きではない	合計
家庭での絵本や本の読み聞かせ頻度	ほとんど毎日	度数	76	27	0	0	103
		パーセント	73.8%	26.2%	.0%	.0%	100.0%
	週に3～4日	度数	44	28	0	0	72
		パーセント	61.1%	38.9%	.0%	.0%	100.0%
	週に1～2日	度数	65	106	3	0	174
		パーセント	37.4%	60.9%	1.7%	.0%	100.0%
	月に1～3日	度数	17	74	7	0	98
		パーセント	17.3%	75.5%	7.1%	.0%	100.0%
	ほとんどしていない	度数	7	57	25	3	92
		パーセント	7.6%	62.0%	27.2%	3.3%	100.0%
	無回答	度数	1	1	0	0	2
		パーセント	50.0%	50.0%	.0%	.0%	100.0%
合計		度数	210	293	35	3	541
		パーセント	38.8%	54.2%	6.5%	.6%	100.0%

（３）図書館利用頻度と子どもの絵本や本の好き嫌い

① 保護者全体の図書館利用頻度

保護者全体の北上市立図書館の利用頻度をみると、よく利用する10.9%、まあ利用する20.7%で、日常的に利用する保護者は合わせても３割程度しかいない。そのうち、主に利用されているのは北上市立中央図書館で、83.7%の保護者が利用している。

② 図書館の利用頻度と子どもの絵本や本の好き嫌い

北上市立図書館の利用頻度と子どもの絵本や本の好き嫌いのクロス集計（表 2）では、よく利用する家庭の子どもの 66.1% は本がとても好きと回答し、まあ利用する家庭では 45.5%、あまり利用しない家庭では 38.1%、全く利用しないでは 28.2% である。図書館をよく利用する家庭の方が、本が好きな子どもの割合が高く、よく利用する家庭と全く利用しない家庭では、絵本や本が好きな子どもの割合に 2 倍以上のポイント差がある。

表２　北上市立図書館の利用頻度と絵本や本の好き嫌いのクロス表

			絵本や本の好き嫌い				
			とても好き	まあまあ好き	あまり好きではない	まったく好きではない	合計
北上市立図書館の利用頻度	よく利用する	度数	39	20	0	0	59
		パーセント	66.1%	33.9%	.0%	.0%	100.0%
	まあ利用する	度数	51	54	7	0	112
		パーセント	45.5%	48.2%	6.3%	.0%	100.0%
	あまり利用しない	度数	61	90	8	1	160
		パーセント	38.1%	56.3%	5.0%	.6%	100.0%
	まったく利用しない	度数	58	127	19	2	206
		パーセント	28.2%	61.7%	9.2%	1.0%	100.0%
	無回答	度数	1	2	1	0	4
		パーセント	25.0%	50.0%	25.0%	.0%	100.0%
合計		度数	210	293	35	3	541
		パーセント	38.8%	54.2%	6.5%	.6%	100.0%

（4）子どもへの働きかけと子どもの絵本や本の好き嫌い

親の子どもへの働きかけ（10 項目）と子どもの絵本や本の好き嫌いのクロス集計（図 1）では、働きかけのうち、「一緒に図書館などの読み聞かせに参加する」家庭の子どもの絵本や本がとても好きな割合は 61.5% で最も高い。次に、「保護者が図書館で良い本の情報を教えてもらう」家庭では、とても好きが 60.0%、「本以外にもお話（ストーリーテリング）をしてあげる」家庭では、とても好き 54.7%、「一緒に絵本や本の内容について話をする」で、とても好きが 52.1% となっている。一方、「いずれもしたことがない」家庭の子どものとても本が好きな割合は 12.1% にとどまる。保護者が自分も子どもと一緒に本と関わり、体験しながら子どもへ働きかける家庭での取り組みが、子どもの本好きによい影響を与えていることがうかがえる。

働きかけ（10 項目）：①図書館で一緒に絵本や本を借りる、②書店で一緒に絵本や本を選ぶ、③一緒に絵本や本の内容について話をする、④一緒に図書館などの読み聞かせに参加する、⑤本以外にもお話 (ストーリーテリング) をしてあげる、⑥読みたい本や絵本を子どもに選ばせる、⑦サイトや情報誌などで良い本の検索をする、⑧保育園で良い本の情報を教えてもらう、⑨図書館で良い本の情報を教えてもらう、⑩いずれもしたことがない

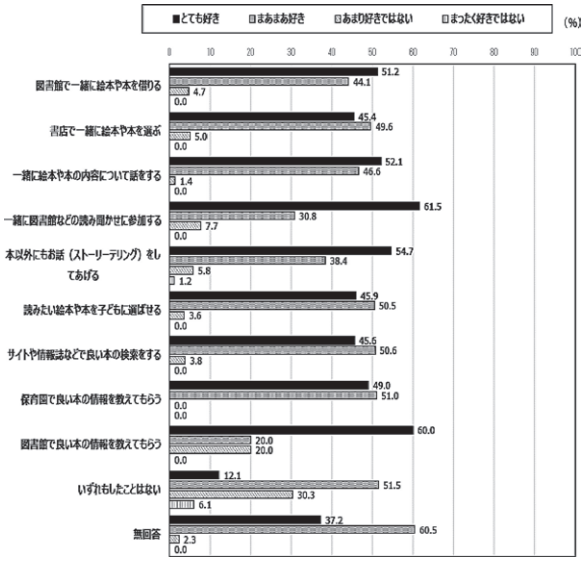

図１　子どもへの働きかけと絵本や本の好き嫌い

（5）家庭での絵本や本の所有数と子どもの絵本や本の好き嫌い

家庭での絵本や本の所有数と子どもの本の好き嫌いのクロス集計（表 3）では、所有数が 30 冊以上の家庭では 54.8% の子どもが絵本や本がとても好きと回答している。21-30 冊の家庭では 41.7%、10-20 冊の家庭では 27.9%、10 冊未満の家庭では 23.1%、ほとんどない家庭では 14.3% で、子どもの絵本や本が多い家庭ほど本好きな子どもの割合が高い。

表３　絵本や本の所有数と絵本や本の好き嫌いのクロス表

			絵本や本の好き嫌い				
			とても好き	まあまあ好き	あまり好きではない	まったく好きではない	合計
絵本や本の所有数	ほとんどない	度数	1	4	2	0	7
		パーセント	14.3%	57.1%	28.6%	.0%	100.0%
	10冊未満	度数	12	28	11	1	52
		パーセント	23.1%	53.8%	21.2%	1.9%	100.0%
	10～20冊	度数	39	86	13	2	140
		パーセント	27.9%	61.4%	9.3%	1.4%	100.0%
	21～30冊	度数	45	62	1	0	108
		パーセント	41.7%	57.4%	.9%	.0%	100.0%
	30冊以上	度数	80	60	6	0	146
		パーセント	54.8%	41.1%	4.1%	.0%	100.0%
	無回答	度数	33	53	2	0	88
		パーセント	37.5%	60.2%	2.3%	.0%	100.0%
合計		度数	210	293	35	3	541
		パーセント	38.8%	54.2%	6.5%	.6%	100.0%

上記のとおり、(2) － (5) の結果からは、保護者の読み聞かせや図書館利用及び子どもと一緒に絵本や本を楽しむポジティヴな子どもへの働きかけ及び家庭の蔵書数などの読書環境が子どもの本に対する良い感情の醸成に影響していることがうかがえる。しかしながら、前述のように 9 割の親が自分の子どもには本好きになってほしいと考えているにもかかわらず、子どもと本の関わりを働きかける保護者の態度には世帯に

よって大きな差異があることが認められる。

（6）世帯年収と家庭での子どもの絵本や本の所有数

次に世帯の生活実態のうち世帯年収に焦点をあて、読書環境との関係をみてみる。世帯年収と家庭での子どもの絵本や本の所有数とのクロス集計（表4）では、所有数が10冊未満の割合は、年収200万未満世帯で25.0%、200-400万未満世帯で14.0%、400-600万未満世帯で13.2%、600-800万世帯で5.7%、800-1000万未満世帯で0%である。また、30冊以上を所有する割合は年収200万未満世帯が25%に対し800-1000万未満世帯は35.7%と10ポイントの差がある。クロス集計からは、子どもの絵本や本の所有数と世帯年収の相関があるとは言えない。しかし、子どもの絵本や本が潤沢にあり、子どもの読書環境が整備されている割合からは、年収によって負の影響を受ける世帯が一定数いる可能性が推測される。

表4　世帯年収と絵本や本の所有数のクロス表

			絵本や本の所有数						合計
			ほとんどない	10冊未満	10～20冊	21～30冊	30冊以上	無回答	
世帯年収	200万円未満	度数	0	3	2	3	3	1	12
		パーセント	.0%	25.0%	16.7%	25.0%	25.0%	8.3%	100.0%
	200万円～400万円未満	度数	2	11	28	12	23	17	93
		パーセント	2.2%	11.8%	30.1%	12.9%	24.7%	18.3%	100.0%
	400万円～600万円未満	度数	3	16	37	30	33	25	144
		パーセント	2.1%	11.1%	25.7%	20.8%	22.9%	17.4%	100.0%
	600万円～800万円未満	度数	0	6	32	19	35	13	105
		パーセント	.0%	5.7%	30.5%	18.1%	33.3%	12.4%	100.0%
	800万円～1,000万円未	度数	0	0	9	10	15	8	42
		パーセント	.0%	.0%	21.4%	23.8%	35.7%	19.0%	100.0%
	1,000万円以上	度数	0	1	2	2	10	1	16
		パーセント	.0%	6.3%	12.5%	12.5%	62.5%	6.3%	100.0%
	無回答	度数	2	15	30	32	27	23	129
		パーセント	1.6%	11.6%	23.3%	24.8%	20.9%	17.8%	100.0%
合計		度数	7	52	140	108	146	88	541
		パーセント	1.3%	9.6%	25.9%	20.0%	27.0%	16.3%	100.0%

（7）世帯年収と家庭での読み聞かせ頻度

世帯年収と家庭での絵本や本の読み聞かせ頻度のクロス集計（表5）では、ほとんど毎日読み聞かせをしている割合は、年収200万未満世帯では8.3%、200-400万未満世帯では9.7%だが、年収400-600万未満世帯では20.1%、600-800万未満世帯では18.1%、800-1000万未満世帯では38.1%で、年収200万未満世帯と800-1000万未満世帯では30ポイントの開きがある。年収と読み聞かせ頻度の相関があるとは言えないが、世帯年収により負の影響がある世帯が一定数いる可能性は推測される。

（8）世帯年収と図書館利用頻度

世帯年収と北上市立図書館の利用頻度の関係をみる（表6）と、図書館をよく利用している・まあ利用しているとの回答を合計した利用頻度の高い家庭の割合は、年収200万未満では8.3%、200-400万未満では25.8%である。一方で年収800万-1000万未満では35.7%、1000万以上の世帯では43.8%であり、年収200万未満と1000万以上では35.5ポイントの差がみられる。相関があると言えないが、図書館利用の割合には差があることが認められる。

表5　世帯年収と家庭での絵本や本の読み聞かせ頻度のクロス表

			家庭での絵本や本の読み聞かせ頻度						合計
			ほとんど毎日	週に3～4日	週に1～2日	月に1～3日	ほとんどしていない	無回答	
世帯年収	200万円未満	度数	1	1	4	5	1	0	12
		パーセント	8.3%	8.3%	33.3%	41.7%	8.3%	.0%	100.0%
	200万円～400万円未満	度数	9	14	30	20	20	0	93
		パーセント	9.7%	15.1%	32.3%	21.5%	21.5%	.0%	100.0%
	400万円～600万円未満	度数	29	21	49	22	23	0	144
		パーセント	20.1%	14.6%	34.0%	15.3%	16.0%	.0%	100.0%
	600万円～800万円未満	度数	19	15	31	22	17	1	105
		パーセント	18.1%	14.3%	29.5%	21.0%	16.2%	1.0%	100.0%
	800万円～1,000万円未	度数	16	4	11	5	6	0	42
		パーセント	38.1%	9.5%	26.2%	11.9%	14.3%	.0%	100.0%
	1,000万円以上	度数	4	2	6	3	1	0	16
		パーセント	25.0%	12.5%	37.5%	18.8%	6.3%	.0%	100.0%
	無回答	度数	25	15	43	21	24	1	129
		パーセント	19.4%	11.6%	33.3%	16.3%	18.6%	.8%	100.0%
合計		度数	103	72	174	98	92	2	541
		パーセント	19.0%	13.3%	32.2%	18.1%	17.0%	.4%	100.0%

表6　世帯年収と北上市立図書館の利用頻度のクロス表

			北上市立図書館の利用頻度					合計
			よく利用する	まあ利用する	あまり利用しない	まったく利用しない	無回答	
世帯年収	200万円未満	度数	1	0	4	7	0	12
		パーセント	8.3%	.0%	33.3%	58.3%	.0%	100.0%
	200万円～400万円未満	度数	4	20	29	39	1	93
		パーセント	4.3%	21.5%	31.2%	41.9%	1.1%	100.0%
	400万円～600万円未満	度数	22	26	32	62	2	144
		パーセント	15.3%	18.1%	22.2%	43.1%	1.4%	100.0%
	600万円～800万円未満	度数	13	26	31	34	1	105
		パーセント	12.4%	24.8%	29.5%	32.4%	1.0%	100.0%
	800万円～1,000万円未	度数	6	9	14	13	0	42
		パーセント	14.3%	21.4%	33.3%	31.0%	.0%	100.0%
	1,000万円以上	度数	1	6	5	4	0	16
		パーセント	6.3%	37.5%	31.3%	25.0%	.0%	100.0%
	無回答	度数	12	25	45	47	0	129
		パーセント	9.3%	19.4%	34.9%	36.4%	.0%	100.0%
合計		度数	59	112	160	206	4	541
		パーセント	10.9%	20.7%	29.6%	38.1%	.7%	100.0%

（9）世帯年収と子どもへの働きかけ

世帯年収と子どもへの働きかけ9項目についてみると（表7）、読みたい本を子どもに選ばせるという回答が年収の多寡にかかわらず、5-6割ある。一方で「いずれもしたことがない」という回答割合は、年収200万未満では16.7%、200-400万未満では8.6%、400-600万未満では6.9%、600-800万未満では2.9%、800-1000万未満では2.4%、1000万円以上では0%と、世帯年収が下がるにつれて、子どもへの働きかけについて「いずれもしたことがない」と回答する保護者の割合が高くなる。保護者から本に関する働きかけをしてもらえず、読書体験が希薄な幼児が一定数存在し、また、それが世帯年収に影響されている可能性がうかがえる。

（10）母親の学歴達成と幼児期の読み聞かせ経験

次に回答者の 94% を占める母親の学歴達成と母親自身の幼児期の読み聞かせ体験の関係（表 8）をみると、親から読み聞かせをしてもらった割合は、中卒で 16.7%、高卒で 38.4%、専門学校卒で 47.5%、大学で 56.2% である。一方で読み聞かせをしてもらった経験がない割合は、中卒で 33.3%、高卒で 12.8%、専門学校卒で 11.9%、大卒で 8.2% である。相関があるとは言えないが、学歴達成が高いほど読み聞かせをしてもらった経験のある割合が高く、学歴達成が低くなるほど読み聞かせをしてもらった経験のない割合が高い傾向があることが把握できる。

表７　世帯年収と子どもへの働きかけのクロス表

			日頃子どもとしていること[複数回答]											
			図書館で一緒に絵本や本を借りる	書店で一緒に絵本や本を買う	一緒に絵本や本の内容について話をする	一緒に図書館などの読み聞かせに参加する	本以外にもお話(ストーリーテリング)をしてあげる	語あたい絵本や本を子どもに選ばせる	サイトや情報誌などで良い本の検索をする	保育園で良い本の情報を教えてもらう	図書館で良い本の情報を教えてもらう	いずれもしたことはない	無回答	合計
世帯年収	200万円未満	度数	1	2	5	0	2	6	1	2	0	2	0	12
		パーセント	8.3%	16.7%	41.7%	.0%	16.7%	50.0%	8.3%	16.7%	.0%	16.7%	.0%	
	200万円～400万円未満	度数	23	40	36	0	10	52	12	10	1	8	6	93
		パーセント	24.7%	43.0%	38.7%	.0%	10.8%	55.9%	12.9%	10.8%	1.1%	8.6%	6.5%	
	400万円～600万円未満	度数	44	61	57	8	25	90	22	9	2	10	12	144
		パーセント	30.6%	42.4%	39.6%	5.6%	17.4%	62.5%	15.3%	6.3%	1.4%	6.9%	8.3%	
	600万円～800万円未満	度数	39	48	49	3	18	63	24	10	2	3	8	105
		パーセント	37.1%	45.7%	46.7%	2.9%	17.1%	60.0%	22.9%	9.5%	1.9%	2.9%	7.6%	
	800万円～1,000万円未	度数	15	24	17	0	9	25	7	3	0	1	7	42
		パーセント	35.7%	57.1%	40.5%	.0%	21.4%	59.5%	16.7%	7.1%	.0%	2.4%	16.7%	
	1,000万円以上	度数	6	8	10	0	3	11	0	2	0	0	1	16
		パーセント	37.5%	50.0%	62.5%	.0%	18.8%	68.8%	.0%	12.5%	.0%	.0%	6.3%	
	無回答	度数	42	57	45	2	19	84	13	13	0	9	9	129
		パーセント	32.6%	44.2%	34.9%	1.6%	14.7%	65.1%	10.1%	10.1%	.0%	7.0%	7.0%	
合計			170	240	219	13	86	331	79	49	5	33	43	541

以上のように（6）－（10）の結果からは、家庭における子どもの読書環境や保護者から子どもへの絵本や本に関する働きかけに関して世帯年収による影響がある家庭が一定割合いる可能性が示唆される。また、読み聞かせと学歴達成との関係は明確ではないが、影響を受けた親が一定数いる可能性は示唆される。

表８　母親の最終学歴と小学校の就学前に親から読み聞かせをしてもらった経験のクロス表

			小学校の就学前に、親や家族から読み聞かせをしてもらった経験					
			親からしてもらった	親以外の家族にしてもらった	経験はない	わからない（記憶にない）	無回答	合計
母親の最終学歴	中学校	度数	2	1	4	5	0	12
		パーセント	16.7%	8.3%	33.3%	41.7%	.0%	100.0%
	高等学校	度数	63	7	21	69	4	164
		パーセント	38.4%	4.3%	12.8%	42.1%	2.4%	100.0%
	専門学校	度数	76	5	19	56	4	160
		パーセント	47.5%	3.1%	11.9%	35.0%	2.5%	100.0%
	高等専門学校	度数	8	3	5	4	1	21
		パーセント	38.1%	14.3%	23.8%	19.0%	4.8%	100.0%
	短大	度数	43	5	5	18	1	72
		パーセント	59.7%	6.9%	6.9%	25.0%	1.4%	100.0%
	大学	度数	41	1	6	25	0	73
		パーセント	56.2%	1.4%	8.2%	34.2%	.0%	100.0%
	大学院	度数	2	0	1	1	0	4
		パーセント	50.0%	.0%	25.0%	25.0%	.0%	100.0%
	無回答	度数	14	0	6	12	0	32
		パーセント	43.8%	.0%	18.8%	37.5%	.0%	100.0%
合計		度数	249	22	67	190	10	538
		パーセント	46.3%	4.1%	12.5%	35.3%	1.9%	100.0%

（11）図書館への意見や要望

北上市立図書館への利用者の評価（n = 331）については、すべての評価項目で非常によい、まあ良いの合計が 8 割から 9 割を超えている。一方で、図書館を利用しない理由について、自由記述（n = 185）から分析をすると、「子どもの特性」（うるさくする、迷惑をかける、本を汚すなど）による理由が 25.4% あった。また、「時間がない」が 23.8%、「行く気がない」（そもそも行く気がない、機会がない、行ったことがないなど）が 21.1%、家や保育園に「本があるから行かなくてもよい」が 15.1% である。また、市立図書館で今後あればよいと思うイベント（複数回答）は、子どものための図書館貸し切り利用 28.3%、絵本や児童書の読み聞かせ講座 25.0%、古本市など 18.9%、戸外でピクニック読書会 17.0%、子どもを預けて読書を楽しむ会 17.0%、絵本を使った子育て講座 16.3%、良い本の選び方講座が 14.6%、パパの参加イベントが 14.0% である。図書館への要望の自由記述（n = 50）で最も多かったのは児童書の分かりやすい「配架・レイアウト」への希望で 24.0% である。また、別枠の質問項目での自由記述欄（n = 51）では、同様に絵本や児童書が見つけやすい「配架やレイアウト・検索」への希望が 15.7%、「子ども専用」の利用コーナーや専用時間、子ども向けの情報発信に関する要望が 33.3% である。

Ⅴ．考察

調査結果からは、幼児期の子どもへの保護者の読み聞かせや図書館利用、一緒に読書体験を楽しみながら子どもに働きかける社会的態度が子どもの本に対する良い感情を醸成しうることが確認され、幼児期からの子どもの本及び読書に対する保護者の意識や態度が、その後の子どもの読書習慣形成に大きく影響する可能性が高いことが示された。この結果は、先行研究が示している内容と同様であるが、より身近な地域で具体的な状況が把握できたことは意義がある。

一方、幼児期の子どもを育てる家庭における読書環境や、子どもが本への良い感情を醸成していくための保護者による具体的な働きかけには、家庭環境によって大きな差があることが確認された。幼児期に絵本や本へ触れる機会や読み聞かせ等の読書体験に差があることは、環境要因によって本への親和性を醸成できない子ども、つまり、「読む権利」を保障されていない子どもが一定数存在していることを示している。

それには、いくつかの要因が考えられるが、今回の調査で明らかになった一つは保護者の日常生活における余裕のなさである。保護者の9割が我が子には本好きになってほしいと願っているにも関わらず、時間がない、疲れているという理由から読み聞かせをすることができずにいる。図書館利用ができない理由にも時間のなさがあげられている。このことから、子どもへの思いはあっても、時間を割くことができずジレンマを抱える保護者が少なからずいることが推察される。

次に、子どもの読書環境や保護者の子どもへの働きかけに世帯収入が影響を与えている家庭が一定数存在していることが挙げられる。家庭の蔵書数など読書環境には差があり、読み聞かせなどの読書体験や図書館利用、子どもへの働きかけなどが制約を受けている家庭が一定数あることが推測され、何らかの支援が必要であると考えらえる。3つ目の要因としては、公立図書館の「利用者の生活の中における図書館」としての機能がうまく活用されていないことが挙げられる。調査結果を見ると公立図書館の利用割合は世帯収入が下がるほど低く、子どもにとって有用で誰にでも開かれていて利用可能な地域の社会教育資源が活用されていない現状がある。図書館には質の良い絵本や児童書が揃っており、無料で楽しめる読み聞かせなどのイベントが準備されている。しかし、図書館にそもそも「行く気がない、行く機会がない」保護者が回答者全体の21.1%もいる。また、図書館を利用しない理由で多いのは「子どもの特性」で、うるさくする、動き回る、本を汚すなどを心配して図書館へ行かない保護者が全体の25.4%、3割近くいる。

上記の結果は、「公立図書館に対する潜在的ニーズ」があるにもかかわらず、図書館機能がうまく活用されていないことを示している。地域の潜在的ニーズに応え図書館が機能していくには、調査で示された図書館への意見要望を活かしていくことが重要である。子どものための図書館貸し切り利用や子ども専用のコーナー、子どもにわかりやすい配架やレイアウトのどの環境設定、読み聞かせ講座や絵本を活用した子育て講座、子どもを預けて読書を楽しめる会、戸外でのピクニック読書会など、子どもの本を介したコミュニティ・ハブとしての図書館機能の充実とそれを地域住民に広く周知することが必要である。

これまで、図書館のイメージは静謐で知的で本しかない堅苦しいイメージがあった。しかし、「出会いの場」「交流の場」「屋根のある広場」として図書館を地域に開いていくこと、静謐で知的なだけでなく、時に楽しくにぎやかに楽しめる図書館を創り発信することが今後は必要である。

また、時間がない保護者や本へのアクセスが希薄な保護者に対しては、つながりやすい工夫や支援方法が準備されることが重要である。例えば、保健福祉部署と連携し絵本を活用した子育て支援の実施、乳幼児健診会場での本とつながる場の設定など館外での支援活動や、図書館経由の生活困窮世帯への経済的支援や生活支援など、地域とつながる分野横断の連携協働の支援コンセプトと支援策が必要である。そうした新たなコンセプトによって子どもの読む権利を地域全体で保障していくことが可能だと考える。

Ⅵ. 今後の課題

今回は対象が限定的なため分析内容には限界がある。今後は対象年齢等を広げた調査・検討が必要である。また、新たな図書館の在り方を模索するには、試験的に支援方策を実践し実証研究によって幼児期の読書環境の支援に向けた具体的な課題を検証する必要がある。

注

1　図書館は単に本や情報資源を集積する場ではなく、住民の日常生活の中にあって多様な活動・出会い・交流により関係性を紡ぎ、住民の日常生活と学びを豊かにし、コミュニティの文化・歴史・つながりを保持する機能と価値を持つ場であるとする（久野，2016）。

2　絵本とは絵を主にした子ども向けの本、本とは子ども向けの文字を主とした児童書を指す。

謝辞

本研究を実施するにあたり、調査にご協力いただいた皆様に対し、記して感謝の意を表します。

付記

本稿は、令和2年度地域政策研究センター地域協働研究ステージⅠ「多様な家庭の未就学児の親子を対象とした読書支援プログラムの開発」の成果の一部である。

引用文献

秋田喜代美 1992 小学生の読書行動に家庭環境が及ぼす影響　発達心理学研究 3（2）90-99

Frey,B.Benesch,C.&Strutzer,A., 2005 Does watching TV make us happy? Institute for Empirical Research in Economics University of Zurich Working Paper Series, 241, 2-40.

Jeffcoat, T. & Hayes, S. C. 2012 A randomized trial of ACT bibliotherapy on the mental health of K-12 teachers and staff. Behaviour Research and Therapy, 50, 571-579.

川崎良孝･吉田右子 2011 新たな図書館･図書館史研究：批判的図書館史研究を中心として」京都図書館情報学研究会

北上市立中央図書館 2014 平成 26 年市民アンケート

北上市教育委員会 2016 平成 28 年北上っ子読書活動推進プラン

北上市教育委員会 2019 令和元年家庭読書アンケート調査

北上市 2019 平成 31（令和元）年子どもの生活実態調査結果報告書

久野和子 2014 新しい批判的図書研究としての「場としての図書館」（Library as Piace）研究―その方法論を中心にした考察」図書館情報学 268-285

久野和子 2016 フィンランドにおける「第三の場」（third Places）としての図書館　神戸女子大学文学部紀要　49 巻 101-114